

福住清風『をられぬみづ』について

片 山 享

清風の『をられぬみづ』については『大日本歌書綜覧』に、

をられぬ水 三卷写 大鐘清風

美濃家苞及尾張家苞の中、説明不可と見ゆる歌を抜き、簡単に評釈せり。その子久樹の天保六年弥生の序あり。著者の端書に省略余韻等より、一方をいひて他を思はせ、心なきものに心あるやうにいひ、物をことごとくいひて意を深め、若しくは句を次第して心得べきことなどを説けり。学習院に久樹の自筆本あり。◇清風は名古屋の人。本居春庭に学び千葉葛野と友とし蒞し。文化文政頃の人。

とある。次いで小島吉雄博士が「新古今和歌集注釈書の話」で、学習院図書館蔵の『をられぬ水』といふのは、天保六年弥生、久樹なる人が序文を書き、その久樹といふ人の父なる

清風といふ人が著述した三冊の写本であるが、これもまた『尾張の家苞』等の説の首肯しがたき歌を採りあげて、これに自見を加へたものである。新古今注釈書の一佳著たるものであつて、上巻には百二十首、中巻には百四十首、下巻には百〇八首の歌を注釈してある。

と紹介された。ただし、著者大鐘清風については明徴を欠き、改めて不明とされた。戦後になつて『国語国文学研究史大成古今集・新古今集』（三省堂昭35刊）の翻刻研究文献の項に学習院大学図書館「をられぬ水」（小島博士影写本）の序文と巻頭歌注が一部翻刻されることがあつたが、尾崎知光氏が『をられぬ水』と福住清風^{（1）}で『国書総目録』に「新古今をられぬ水・三卷六冊(別)をられぬ水・野中の水」①学習院(天保六福住

久樹写三冊）・飯田（自筆福住清風遺稿の内）とあるのによつて飯田図書館を調査され、著者は伊那歌壇で著名な歌人であつた福住清風であること、また飯田市立図書館に蔵される二部の「をられぬみつ」を調査、学習院大学図書館本と比較して論じられた。これに関連して小島博士が「新古今集」をられぬ水」のことなど^{〔註〕}で清風を中心に論じられている。近時、長谷完治氏によつて「福住清風の「なごりの波」について^{〔註〕}」で解説を付して「なごりの波」の新勅撰集歌注が翻刻された。

以上が清風の「をられぬみつ」を中心とした研究経緯であるが、私も先学に導かれて先年学習院大学図書館・飯田市立図書館を訪書し、さらに飯田図書館長今村兼義氏の御高配によつて飯田市座光寺欠野、北原斌夫氏蔵「野中水」を閲覽し、一応「をられぬみつ」諸本を見通したので、それについて考察を試みたい。

「をられぬみつ」諸本は(1)学習院大学図書館本三冊(2)野中水五冊(3)市立飯田図書館甲本五冊(4)同乙本五冊の四部であるが、いずれも清風自筆稿本であるのでその成立が問題となる。学習

院本の久樹序文に「時に天保六とせといふ年の弥生」とあり、飯田図書館甲・乙本には成立を示す記載はないが、「野中水」の奥に「天保十四年九月 笹垣清風しるす」とあり、野中水と飯田図書館甲・乙本は内容的にも密接に関連があるので、従来指摘されてきたように、まず学習院本が書かれ、後になつて右の三書が書かれたことになる。

(1) 学習院大学図書館本（書架番号三一五―二三）

袋綴三冊。薄青表紙、題簽左肩に棹紙して「をられぬ水上」「中」「下」とある。縦27・1センチ、横18・6センチ。本文料紙楮紙。遊紙なく第一冊は久樹の「をられぬ水序」次いで清風自序があり、内題「をられぬみつ 上巻」とあつて巻頭歌より冬部まで、四季部の歌一二〇首の注文を収める。第二冊は内題「をられぬ水 中巻」とあつて、賀部の歌から釈教部の歌まで一四〇首の歌注を収める。第三冊は内題に「をられぬ水下巻」とあつて次に「これより美濃家更折添の歌也、このふみの註ともこの、に用あるをのみあけたればもれたるも多かりてらし合せて考へみるへし」とあつて、美濃の家つと折添の新勅撰集歌より新続古今集および千載集歌注から一〇八首を取り出し注を付したものである。久樹序は詞花の華新古今集の注釈の少いことを述べ、父がその註釈を教へ子達のために著作し、

人々にすゝめられて上梓せんとするに当たつてこの序を書いたよしを記している。この序は清風自筆の本文とは書体も異なり、久樹自筆かと思われる。『伊那歌道史』の福住家系図によると、清風の嗣子は春年となつており、久樹の名は見当らない。春年が久樹を号したか否かも不明である。ただ、小島博士が指摘されているごとく、『伊那歌道史』の付載年表、文政十一年六月二日の植松茂岳飯田来訪時の酒席に清風ら六人が出席し、その中に久樹の名が見える。二二日、千置方へ行く。松老、島村、章生、要人、貞固、久樹出席、酒をのむ。」このことから久樹が飯田在住歌人であつたことは明らかで、序文の記述からすると、この人物が清風の子であつたことになる。この序から「をられぬ水」が版本として上梓する計画があつたことが明らかで、何らかの事情で上梓計画が挫折し、草稿のみ、学習院図書館に伝えられたものと思われる。

清風は、安永七年（一七七八）信州飯田本町の長瀬五郎右衛門の四男として生れ、同町知久町の町年番福住喜三郎の養子となつた。福住家は茶葉商の傍ら貸本業を営み、藩主の仕送り御用達を勤める家柄であつた。祖父・養父共に俳人であり、清風も俳句を作つたが、後和歌を詠み、文化二年服部菅雄の門に入った。当時信州を来訪した森広主、植松茂岳ら本居派門流歌人

の指導を受け、新古今集を歌道の精髓とし、流麗な歌風をもつて同町出身の千葉萬野と並んで伊那歌壇の双壁とされた。多くの門弟を育成し、門下に北原福雄、松尾多勢子などを輩出した。中津川の市岡家に蔵される『清風撰歌』一冊は清風門下と思われる七五人の各一首を収めるといふ。嘉永元年（一八四一）七歳で没した。天保六年は清風五八歳の時である。

清風の本書執筆の意図はその自序に明らかである。

これはしも尾張の家苞（の註釈にいかにおもはる、美濃家裏の折添にときひかめたる歌ともをものしたる書なれば）又ハ美濃家裏の折添（の註釈にいかにおもはる、美濃家裏の折添にときひかめたる歌ともをものしたる書なれば）に合せて猶考ふへし、かれにゆつりてこれにはもらしたること、も、多かり、此其の歌の詞をはふきて其意を余韻にふくめたるなどはことに解しかたくてとかく人のいふことなれと此頃（その時）の人々のあらたにしてたるふりにはあらず、もとよりしかよめる例あり、こゝにあくるをみてしるへし（下略）

とあり、「これはしも尾張の家苞、美濃家裏の折添にときひかめたる歌どもをものしたる書なれば」と昂然と『尾張の家苞』『美濃の家裏折添』の誤解を正す意図を標榜している。右の文中の消去記号および傍書は朱書きで、多少忸怩たるものを感じたのか、草稿の段階で「ときひかめたる」を消して、「註釈はいかにぞやおもはるゝ」と柔げた表現に直しているが、当時の

清風の壮図を窺うに足るものがある。

ただし、自序では「尾張の家苞」のみを掲げているが、『大日本歌書綜覧』が「美濃家苞、尾張家苞の中、説明不可と見ゆる歌を抜き、簡単に評釈せり」と述べるごとく、美濃尾張兩家苞を対象とし、大半は美濃の家苞への不審注となっている。特に新古今集歌二六〇首注の中で五三歌注に「家つとの難はあたらす」とか「家つとはいたくあやまれり」などの批判的言辭がみえる。若干の例を検討しておきたい。

三九 玉ほこの道行ひとのことつてもたえてほとふるさみたれの空（新古今二三二）

本歌恋しなほこひもしねとや玉鉾の道行人のことつてもせぬ、この歌家つとに何のせんもなく五月雨には似つかはしからすとあるはいか、道行人のことつてもたえてといへるにて道のたえたるよしはしられたり、言伝ものも、しに心をつけてみるへし、道のたえたるは五月雨の日数ふるまゝに何憍なとのたえたるをいふ、道のたえたるか五月雨の情なれば似つかはしからすなといふへき歌にはあらず

「美濃の家苞」上句古歌をとられたれど、何の詮も見えず、さみだれに似つかわしからず聞ゆ。

「美濃」の批難に対して「尾張」は「本歌は詞をとるものなり、

別に何の詮かはあらん」と言い、「さみだれの降つゞきて往来の人のまれなる也、何の似つかわしからぬことかはあらむ」と明解に反論している。清風は「言伝も」のも文字に注目し、も同じ趣の事柄の一つを挙げて他を言外に類推させる意の係助詞と考え、橋などが落ちて道の絶えた状況を類推し、五月雨の歌としてふさわしいことの証としたのであるが、やゝ理におちた注解であろう。

一二二 もしほ草かくともつきし君か代の数によみおくと和歌のうら波（七四一）

家つとにかくともつきしとは数をかくことなるへきに、数によみおくといひては二ノ句へまはらす、いかなることならんといへり、もしほ草かくは文字をかくといふことにて、もしをかくはやかて歌を書こと也、よく聞えたる歌なるをや

「尾張の家苞」かくともつきしとは籌をかく事なるべきに、数によみおくといひては二の句へまはるべからず、いかなる事ならん

「美濃の家苞」にはない。「尾張」が籌（数とり）を数えるの意に取ったのは誤解で清風のいうごとくである。

一六二 たのめおきしあさちか露に秋かけて木葉ふりしく宿のかよひ路（一一二八）

本歌あきかけていひしなからもあらなくに木葉ふりしくえにこそありけれ、是は三二四五と句を次第してみるへし、秋かけては夏より秋へかけて也、一首の意は秋かけてあはんとたのめおきし浅茅が露の上に又木葉かふりしきたれば、人のかよひ路はいよ／＼たえたりとなけきたる意也、きて家つとに秋かけては冬より秋へかくるを秋かけてとよめる例なきこと也といはれたれと、拾遺集に春かけて聞んともこそおもひしか山ほと、きすおそくなくらむといふ歌あり、これは夏より春へかけての意也、かゝる例あれはしかよむとも何の難かあるへき

〔美濃の家苞〕本歌いせ物語へ秋かけていひしなからもあらなくに木葉ふりしくえにこそ有けれ、秋かけてといへる、本歌の詞なれば、なくてかなはざれども、此歌にてはかなひがたし、其故はすべてかけてとは、前より後へかくることをいふ詞なれば、秋かけては、夏より秋をかけてにて、俗言に秋へかけてといふ意なるに、木葉ふりしくは時節たがへれば也、木葉は夏より秋へかけてちる物にはあらざるをや、よみぬしの心は、木葉は冬の初ちる物なるが、秋の末よりもかつ／＼ちる意にや、されどさやうに後より前をかくることをかけてといふ例はふるきことにて、ことわりもかなわず

「秋かけて」の解釈について「美濃」は下句の「木葉ふりしく」にかけて解し、その矛盾を指摘しているのであるが、清風はこの句を上句にかゝるものと見て合理的に理解しようとしている。「句を次第してみるへし」というのが清風の新古今歌理解の一方となつていたのであるが、そしてそれは新古今歌風の語順を考へることによつて醸し出される複雑な陰影表現を単純化によつてこわす面も確かにあるのであるが、この場合は有効に働いてると云つてよいであろう。「美濃の家苞」への反証として掲げた拾遺集歌について「これは夏より春へかけての意也」と云つたのは歌の構造上の問題と思われるが、「八代集抄」が「春より早くきかんとと思ひしに、夏になりても遅きと也、待わぶる心を説也」というごとく「春かけて」はやはり夏より春にかけての意ではなく、時を前に戻して春からという意味でその待望の久しかったことを表現したものである。この点「をられぬ水」の表現はやゝ舌足らずというべきであろう。

「野中水」では、

本歌、秋かけていひしなからもあらなくに木葉ふりしくえにこそありけれ、三二四五とつ／＼かけてみるへし、二の句あさちか露のうへの意也、のうへのつ／＼めとなるにてしるへし、秋にならばあはんと人のたのめおきし浅茅か露の上に

又木葉のふりしきて、いよく／＼宿のかよひ路はたえたりとな
けきたる意也
となつてゐる。

二三五 いまさらに住うしとともいか、せんなたの汐家のゆふ
くれの空（一六〇五）

家つとに、二三ノ句我身のことをいへるなるへきに、此人灘
の汐家にすめるよしもなければいか、といへり、是は伊勢物
語にむかし男津の国うはらの郡あし家の里にしろよししてい
きて住けりとある詞をとりて、其住人になりてよめる歌也、

灘の汐屋はあしやの里をいふ

〔美濃の家苞〕初二句はうちかへして心得べし、二三の句我身
の事をいへるなるへきに、此人なだのしほ屋にすめるよしもな
ければいか、又なだのしほ屋に住人のうへをよめるにしても
いか、

〔美濃〕の疑問に対して「尾張」は、述懐の歌は実事を詠む
のが例であるから作者（秀能）が津国に下つて住んだこともあ
るかもしれないがよくわからない。「又題詠と覚しければ、か
ゝる人を儲てよめるも難ならじ」と述べている。本書の解は
「尾張」の題詠説を更に一步進めて伊勢物語による本説詠とみ
るのである。確かにこれも一解であらう。

以上、二三の例について、本書が「美濃の家苞」「尾張の家
苞」への疑問評として書かれたことの実態をみてきたが、清風
は飯田在住の歌人であつて、その学問は鈴屋流の影響が濃厚で
あるが、殆ど独学の人であり、独自の歌観・歌解をもつが、誤
解にもとづく解を多いようである。例えば、

七七 なく鹿のこまにめさめて忍ふかなみはてぬ夢の秋のおも
ひを（四四五）

秋のかなしきおもひをたへしのふ意なり、したふの意はあら
す、家つとは誤解也

〔美濃の家苞〕二の句いうならず、秋の思ひをしのぶといふこ
と、いかにいへるにか、こゝろえず

〔尾張の家苞〕（前略）秋のおもひとは秋の哀なる情也、しの
ぶとはしたふ也、一首の意秋のあはれなるこゝろばへを夢に
見て鹿の声にてさめていとどあはれなるゆゑみはてざりし夢
の末のさぞあはれならんとおもひて恋したふとなり

〔美濃〕は秋思を「しのぶ」ことへの疑問を出し、それはしの
ぶを慕ふ・偲ふ・賞ぶの意の方向でみた疑問である。「尾張」
の解は「しのぶ」の原義を一層明確に示したものが、清風は
悲秋の思だからそれは「たへしのぶ」意であるとする。しか
し、これでは「見果ぬ夢の秋の思ひ」という悲哀の中にも甘美

な艶を含んだ秋思の世界とは異質なものとなつてしまふ。誤解
といふべきである。

一〇二 かたしきの袖をや霜にかさぬらん月に夜かるゝうちの
はし姫(六一一)

月に夜かるゝは寒き故月にうとくなりたる也、家つとはいた
くあやまれり

〔尾張の家苞〕本歌さむしろに衣かたしきこよひもや我をまつ
らんうちの橋姫、月に夜かるゝとは月夜には人めを避てまつ
人のはぬ也、一首の意はうちの橋姫が月の夜には人がよか
れしてとはぬ故まつ人の衣にかさぬべきかたしきの袖を霜に
かさぬる事と也

〔美濃〕はこの歌を取上げていない。〔尾張〕は本歌取によ
つて「月に夜がるゝ」は月夜には恋人が人目を避けて訪れが絶
える意とするのであるが、清風は本歌取を認めなかつたらしく、
寒さのために月に疎遠になる(月をみるこがなくなる)意と
みるのである。〔野中水〕ではさらに明確に、

月に夜かるゝは月の夜にかるゝにて、寒ければ月をみぬ也、
四五一二三とつゝけてみるへし

と解しているが、誤解である。「をられぬ水」は美濃・尾張批判
注としてみるべき解もあるが、誤解も多かったことは否めない。

二

学習院大学図書館本「をられぬ水」が書かれた後、約八年後
に清風は「野中水」を著述した。飯田市立図書館甲・乙本はそ
れ以後に書かれたものと思われる。因みに各本の注と比較して
一例をあげると、

題しらす 式子内親王

風さむみ木葉はれゆく夜な／＼に残るくまなき庭の月かけ(六
〇五)

〔学習院本〕一二ノ句は風の寒きまゝにこの葉のちり行といふ
意也、よな／＼にはひと夜／＼にの意にて、にもしいとちか
らあり、家つとの難はあたらす

〔野中水〕さむみとはれ行とかけ合り、寒ければ空ははれ行も
のなれば也、夜な／＼には一夜／＼にの意也

〔飯田甲本〕夜な／＼はこゝにては一夜／＼にの意也、はれゆ
くとあるにむかへてさむみとはいへり、寒ければ空ははるゝ
物なれば也

〔飯田乙本〕はれ行とあるにかけてさむみとはいへり、さむけ
れば空ははるゝもの也、よな／＼はこゝにてはひと夜／＼に

の意也

学習院本は「美濃」の「初句寒みいかゞ、三の句にもじい
ならず」の批難に対して駁したもので、「尾張」も「三の句に
もじいならず」に対して「勝れてめでたき調にはあらねど、
此句をいうならずと難せば歌の道の破滅也」と弁護している。
清風はさらに「にもじいとちからあり」と賞するのである。

「野中水」になると家苞への批判は姿を消し、「さむみ」と
「はれ行」の照応を指摘し「夜な〜」の解を付す。「飯田本」
は乙本が先に書かれたと覺しく、より「野中水」に近い。それ
は「さむみとははれ行とかけ合り」が「はれ行とあるにかけて
さむみとはいへり」と「かけて」の表現を残すが、甲本では
「はれゆくとあるにむかへてさむみとはいへり」と歌の享受的
態度から表現の構造に踏み込んでゆく姿勢を一層明確にしてい
る。また「夜な〜」の注文の位置も野中水↓乙本↓甲本と変
っていることよってよいえよう。こうしてみると野中水↓乙
本↓甲本という成立過程を想定してもよいであろう。

(2)北原斌夫氏蔵「野中水」

袋綴五冊。縦28・2センチ、横19・6センチ。表紙は淡黄地
横縞表紙。題簽左扇小短冊に「野中水上」「上ノ下」「中」
「のなかのみつ」中ノ下「野中水下」とある。各冊第一丁右下

に「北原藏書」の朱印、終丁に「北原」の墨印がある。本文料
紙楮紙、遊紙なし。第五冊奥に「天保十四年九月 笹垣清風し
るす」の識語がある。「信濃人物志」に「福住清風は通称聯次
郎、笹垣又松年翁と号す。」とあり、笹垣清風はその号である。
第一冊は巻頭歌より夏部に至る一五五歌注、墨付三十六枚。第二
冊歌部より冬部の二三一歌注、ただし、三三七（新古今六一
八）の終円歌「霜さゆる山田のくろの」は歌のみで注文を欠い
ている。墨付四六枚。第三冊賀部より恋三の中途まで一六六歌
注、墨付三八枚。第四冊恋三の中途より雑部中の中途まで一七
一歌注、墨付四〇枚。第五冊雑部中の中途より釈教部に至る一
八五歌注、ただし、七二三（新古今一五七三）実定の歌「夜は
にふくあらしにつけて」は歌のみで注を欠く。墨付三九枚。第
三冊以下は部立と関係なく分冊にしたものらしい。総歌数九〇
八首で学習院大学図書館本『をられぬ水』上中二巻に収めた新
古今歌二六〇首に比すると約三・五倍の歌数である。大体は美
濃尾張両家苞に採られた歌であるが、両書にみえない歌が新古
今歌番号（新編国歌大観）で示すと一三〇・三八八・五六八・
七六八・八四三・一六七六・一九四七・一九六八の八首があり、
このうち学習院本に既に三八八・五六八の二首が見える。また
「尾張の家世」にあつて採られない歌は三〇三・三五〇・三五

一・九八五・一〇九九・一二二・一八二七・一八三四の八首、
「美濃の家苞」のみにある歌一八四三の一首である。こうして
みるとほとゞ美濃尾張兩家苞の採取歌に重なり合うのであるが、
若干ではあるが、そのみではなかつたことに注目すべきであ
る。

「野中水」が飯田図書館甲・乙本に比して早く書かれたもの
である証は、「野中水」の頭注によつて明確である。すなわち
「野中水」には二三個所に互つて欄外注記がある。例えば、

一八 なこの海の霞のまよりなかわれは入日をあらふ沖つし
ら波(三五)

枕草紙にも舟に波の なごの海のなごになごむといふ意をそへたり、
かけたるさまなき なごむは波風のなきたるをいふ、なごみたる
はかりなごかりつる 海の霞の間よりなかわれはの意也、下旬沖は
海とも見えすかしと あるにてしるへし

いふ意也

「飯田乙本」初句のなごになごむといふ意をそへたり、なごむ
は波風のしつまるをいふ、春曙抄に、舟に波のかけたるさま
などさばかりなごかりつる海ともみえずかしとあるにてしる
へし、なごみたる海の霞の間よりなかわれは沖にはしら波の
立ていり日をあらふといふ意也

「飯田甲本」初句のなごになごむといふ意をかねたり、なごむ
は波風のしつまりたるをいふ、春曙抄に、舟に波のかけたるま
まなどさはかりなごかりつる海ともみえずかしとあるにてし
るへし、なごみたる海の霞のまよりなかわれは沖にはしら波
のたちていり日をあらふ春の夕くれのけしきはいひしらすと
いふ意也

二七一 吹まよふ雲をわたるはつ雁のつはさにならすよもの
秋風(五〇五)

新六帖

吹まよふ風にたよ ふきまよふはふきまよはす也、はすのつゝめ
ふ雲鳥のあやふやう ふとなるにてしるへし、吹まよふ雲とつゝけ
きて世をわたる身は、 り、ならすはなれさす
これも初句はふきま よはすの意也

「飯田乙本」ふきまよふは吹まよはす也、はすのつゝめふとな
るにてしるへし、吹まよふ雲とつゝけり、新六帖の歌に、吹
まよふ風にたよふ雲鳥のあやうしうきて世をわたる身は、
これも吹まよはすにて吹まよふ雲とつゝけり、つはさになら
すは翅になれさす也

「飯田甲本」ふきまよふ雲とつゝきて吹まよふは吹まよはす也、
はすのつゝめふとなるにてしるへし、新六帖の歌に、吹まよ
ふ風にたよふ雲鳥のあやうしうきて世をわたる身は、是も

吹いまいふいは吹いまいよいはすいにて同い格也、つはきにならずは翅に
なれさするにて、れさするのつゝめるとなるを又らすとのへ
たることは也

右の二例によつても明らかなごとく、『野中水』の欄外に書か
れた注記が飯田甲・乙本の本文に取入れられているわけで二
補注中の一八注が注本文に取入れられているのである。

それではなぜ学習院本と飯田図書館甲・乙本が『をられぬ
水』という同一書名を有するのに『野中水』のみが別名なので
あろうか。『をられぬ水』の題名について尾崎知光氏が「おそ
らくは古今集春上の、水のはとりに梅の花のさけりけるをよめ
る 伊勢 春ごとに流るる川を花と見てをられぬ水に袖やぬれ
なむの歌の句をとつて命名したものであろう。」^(注16)と指摘されて
いる。『野中水』もまた古今集の

いにしへの野中のし水ぬるけれど本の心をしる人ぞくむ

によるものであろう。尾崎氏が「をられぬ水」に対して「それ
に到達しようと努力しても水久に及ばない理想の世界」の寓意
を認めていられるが、そのひそみにならえば、「野中水」は今
や真の理解者をもつて自らを任じたことになる。上梓計画が挫
折した清風は八年後再び新古今注釈に挑んだ。それは美濃・尾
張両家菴注という狭い視野を捨てて自分自身の新古今注釈を意

図したのである。とはいえ勿論両家菴から離れ得なかつたので
はあるけれども。従つて意図も分量も異なる新著に同じ書名を
付けることを肯んぜず命名したのが「野中水」であつた。尾崎
氏が引かれたごとく、市村威人著『伊那尊王思想中』^(注17)に「清風
また、語格文法、仮名遣に對する注意、頗る周密にして苟もせ
ざりし事、彼が著書の伝写を誦ふものもあるも、誤写を恐れて敢
て許さず、自ら九部を淨書し、之を四天王以下の高弟に頒つた
と云ふのでもわかる。且、其字を作る一字一句苟もせず、筆蹟
の優美なること、新古今の歌の流麗なる如く、配字の整然たる
ことは名工の手に成れる摺物の如くであつた。」とあるが、九
部であつたか否かは別として、この言伝えは真実であつたと思
われ、飯田図書館甲・乙本二部は確かに淨書本と思われ、同館
所蔵の清風遺著「なごりの波」「むつのはな」二部、「よぶこと
り」「夕月夜」一部いずれも表紙・料紙・筆跡が同一であるこ
とからも推察される。とすれば、晩年門下高弟に与えた淨書本
で清風は再びこの新古今注釈書に懐かしい「をられぬみづ」と
いう書名を付したのではなかつたかと思われる。こうして『野
中水』は清風が手許に置いた草稿本ということにならう。所蔵
者北原家は旧座光寺村の郷士、名主の家柄で、清風の弟子北原
稻雄(信賢)より五代の子孫である。『野中水』の外、清風遺

稿「言のつかね緒」二冊、「ひとつ心」一冊、「夕月夜」一冊、「ひとつのはな」一冊、すべて飯田図書館所蔵の浄書本と装頓・料紙も異なり、清風手沢の草稿本であると思われる。「嘉永元年といふとの師走うつしぬ きたはら信賢」の識語を有する清風家集「倭文手巻」一冊もあり、稲雄を通じて北原家に所蔵されたものであろう。

三

『をられぬみつ』甲・乙本にうつる。

(3) 飯田市立図書館甲本(書架番号一〇一八〇)

五冊。袋綴の綴じ部分をくるんでいる。銀粉散らし素表紙。

縦27・7センチ、横19・3センチ。外題は打つけ書で左肩に

「をられぬみつ 一」以下二と五とある。各冊外題横および第一丁に「福島蔵書」の印記がある。これについて尾崎氏が清風の

高弟福島秋郷の子であり清風門下でもあった福島地栄を指摘

されており、それに従うべきである。各丁虫損がある。第一冊

内題「をられぬ水 一の巻 春歌」とあり、巻頭歌より夏歌の

一五四首注を収める。墨付三九枚。『野中水』に比べると春部八九の歌一首を欠き、また一四七・一四八の歌順が逆となって

いる。第二冊内題「をられぬ水二の巻」秋歌より冬歌の二三一首、墨付五〇枚。第三冊内題「をられぬみつ 三巻」賀歌より恋三中途まで一六五首、墨付三九枚。『野中水』に比して五三二の一首注を欠いている。第四冊内題「をられぬ水 四の巻」恋歌より雑中の中途歌まで一七一首、墨付三九枚。第五冊内題「をられぬみつ 五の巻」雑部より釈教部まで一八五首、墨付四〇枚。『野中水』に比して七九六と七九七の歌順が逆である。総歌注数九〇六首、『野中水』に比して二百少く、歌順異同も書写の際のあやまりであらう。

(4) 飯田市立図書館乙本(書架番号一〇一八一)

五冊。第一冊外題に「をられぬみつ 壹」とあるほか、甲本

と表紙・体裁・料紙・内題すべて同じである。甲本と同様表紙および第一丁に「福島蔵書」の印記があるが、その他乙本には各表紙右下に「樋口」の印記がある。注文の細部を別にして甲

本との異同をみると、第一冊七番の俊成の「沢におふるわかなならねと」の歌は歌のみで注文を欠いている。前述したごとく、

『野中水』『をられぬみつ』飯田甲・乙本の成立の前後まずは

『野中水』が草稿として書かれ、浄書本として飯田図書館甲・

乙本が書かれたわけであるが、その時期は『野中水』成立の天保十四年(一八四三)九月以降、清風が七一歳で没した嘉永元

年（二八四八）九月十四日以前の約五年の間で、最晩年のことであつた。甲・乙本の前後については、学習院本一八歌、野中水の一八・二七一の歌注例を掲げたが、今若干の例を追加してみておく。

百首歌牽りける時

惟明親王

一六鶯のなみたのつら、うちとけて古果なからや春をしるらん
（三一）

〔野中水〕日かけもさらぬ谷の古果にけさ鶯のなくはいかて春をしりつらん、涙のつら、のうちとけたるにてしるらんとといふ意也、つら、は露にても涙にてもつらなりて氷るをいふ

〔頭注〕初句ニ鶯のけさなくはと詞のそはる格也、此集には此格多し

〔飯田乙本〕初句ののもしは心をいひのこしたるのもしにて、

此集には此格多し、鶯のけさ鳴声はと詞をそへてみるへし、ふるすなからは谷のふるすにありなから也、つら、は波にても露にてもつらなり氷るをいふ

〔飯田甲本〕初句ののもしは詞をいひのこしたるのもしにて、

此集には此格多し、鶯のなくはと詞をそへてみるへし、ふるすなからは谷のふるすにありなから也、にあのつゝめなとなるにてしるへし、つら、は波にてもしづくにてもつらなりこほるをいふ

〔野中水〕から乙本へ注文は大きく書きかえられ、むしろ乙本注は欄外頭注を中心としたものになっている。甲乙本を比べるに乙本では「鶯のけさ鳴声はと詞をそへて」と頭注の文をとっているが甲本では「鶯のなくはと詞をそへて」と簡略な表現をとり、さらに甲本では「ふるすながら」の説明に「にあのつゝめなとなるにてしるべし」を加えている。また「心をいひのこしたる」を「詞をいひのこしたる」に変え、「野中水」の「露にても涙にても」が乙本では「波にても露にても」甲本「波にてもしづくにても」と変えている。

成茂

三〇七 冬のきて山もあらはに木葉より残る松さへ嶺にさひしき（五六五）

〔野中水〕三の句に木葉よりてといふ詞のそはる格也、下句嶺に残る松さへさひしきと詞を次第してみるへし、さひしきはさひしかりけり也、かりけりのつゝめきとなるにてしるへし
〔飯田乙本〕冬嶺孤松といへる詩の句をとれり、三の句ニ木葉よりてといふ詞のそはる格也、下句みねにのこる松さへさひしきと詞を次第してみるへし、さひしきはさひしかりけり也、かりけりのつゝめきとなるにてしるへし

〔飯田甲本〕冬嶺秀孤松といへる句をとれり、三の句の下に木

葉ふりてといふ詞のそはる格也、下句は韻に残る松さへさみひしきと詞を次第してみるへし、さみひしきのきはかりけりのつゝ、いまりにて常にいふしきとはこと也。

乙本は「野中水」に漢詩句の典拠を加えたのみで以下は同文であるが、甲本では前二本の「さびしき」の説明を全く書き換えて「さみひしきのきはかりけりのつゝ、まりにて常にいふしきとはこと也」と説明している。清風の語法説明に「つゞめ」という考え方は随所に出ているが、ここでは「さびしき」の連体止の効果を独特の語法説明でしているのであって、前二本の図式的説明から内容的説明に踏み込もうとしている。

こうしてみれば、清風最晩年にさほど時期を距てて書かれたとは思えない飯田岡書館蔵『をられぬみづ』甲・乙本は乙本が先に書かれ、甲本が後に書かれたことになり、「野中水」↓飯田乙本↓飯田甲本の成立過程を辿ったと推定してよい。たゞ一つ疑問として残るのは、飯田乙本の第一冊春部七番の注文欠脱の問題である。前述したごとく乙本では詞書・作者名・歌のみを書いて注がない。甲本では

述懐百首に若菜

俊成卿

沢におふるわかなならねといたつらに年をつむにも袖はぬれけり(一五)

わかなをつむにむかへて年をつむとはいへる也

とある。「野中水」では「若菜に老をかけ合せたり」とあって全く異なっていて、甲本注は「つむ」の懸詞の指摘であるが「野中水」の老若の照応を指摘した注よりは優れている。おそらく乙本の欠脱をそのままにして甲本で改めて注を付したものはなからうか。

かくて、飯田甲本が清風最晩年に書かれた『をられぬみづ』の自筆決定稿であったと認められるのである。それにしても驚くべき執念である。

和歌に師なし、古歌をもて師とすといへるはまことにしかり、されは古歌の意をよくさとりえてしらへのうるはしきことをしるへし、歌はしらへによりてよくもあしくも聞ゆるもの也、又詞に用捨あり、ことはあしければ歌の心もいやしく聞ゆるもの也、代々の勅撰の中にも新古今はかり歌めてたくしらへうるはしきはなし、歌は此集にならてよむへきことそかし(よぶこどり)

という歌観に立った歌人清風の心血をそいで新古今集に挑んだ軌跡ともいふべきである。しかし、美濃・尾張両家荷批判から出発した清風であるが、そして、個々の歌の解釈において優れた句解とその独自性も認められるが、新古今歌風理解度にお

いて、また学問的実証性において両家を超えることはできず、誤解も多くみられ、一籌を輸することは否みがない。むしろ清風の新古今憧憬と熱情は新古今享受史において高く評価すべきであろう。

注1 「新古今和歌集の研究」(星野書店・昭19刊)所収。

注2 「をられぬ水」と福住清風」(源林第18号(昭44・12))

注3 「新古今集」をられぬ水」のことなど」(語文(昭56・4))

注4 「福住清風の『なごりの波』について」(梅花女子大学文学部紀

要(昭58・12))

注5 村沢武夫著「伊那歌道史」(山村書店・昭11刊)四五八頁。

注6 兼清正徳著「桂園派歌道史の結成」(桜楓社・昭60刊)四九四頁。

注7 「本居宣長全集」第三卷(筑摩書房・昭44刊)による。

注8 原本による。

注9 佐藤寅太郎編「信濃人物志」(文正社・大11刊)

注10 市村威人著「伊那尊王思想史」(下伊那郡国民精神作興会・昭

4刊、複製図書刊行会、昭48刊)一〇六頁。

注11 前掲注2論文。

伊那関係資料について長谷完治氏から便宜を与えられた。

記して謝意を表す。